〈外科系〉

小児外科

平成23年度（平成23年４月－平成24年３月）の外来患者総数は5738名、うち新来患者は587名であった。前年度に比べて総数では18名、新患数は41名減少した。入院患者総数は689名で、前年より25名減少した。患者平均在院日数は9.8日と前年度より0.6日延長した。

入院患者、緊急手術、内視鏡手術の年齢分布は表１の如くであった。新生児数は前年度より１名少ない53名で新生児外科症例は37名と昨年より６名増加した。16歳以上の入院患者は8名で、内科・外科で経過観察中のcarry-overの症例、あるいは当センターで治療を行うべき特殊な症例であった。入院患者のうち、緊急入院患者の占める割合は37％（259名）であり前年度と大きな変化はなかった。

平成23年度の入院患者の主たる疾患別分布、手術の内訳を表２に示した。鼠径ヘルニアは嵌頓を含め228名で最も多く、うち227名が手術を受けた。新生児疾患では、ヒルシュスプルング病が最も多く、腸閉鎖・狭窄症、鎖肛、臍帯内ヘルニア、食道閉鎖症が続いた。出生前診断に基づいて母体搬送される、横隔膜ヘルニアは1件もなく、全国的な発生頻度から考えて少ない傾向は変わらなかった。悪性腫瘍は、神経芽腫群腫瘍が毎年ほぼ同数で今年度は８名であったが、新生児症例が２例認められた。肝腫瘍が６例、奇形腫群も６例と比較的多くみられた。肝胆道疾患のうち、胆道閉鎖症の多くは胆管炎、肝機能異常などの治療のための再入院であるが、新患2名に対しては肝門部空腸吻合が行われた。

年間総手術件数は635件、緊急手術は134件であった。前年に比べ総手術件数は62件減少した。平成18－20年度の平均と比較すると総手術件数は26件減少している。今年は、３月11日に未曾有の東日本大震災が起き、当院の被害は被災地とは異なり大きなものではなかったが、手術はおおよそ2週間に渡って中止となりその後もしばらく手術件数が低迷した。特にヘルニアが昨年度と比較して81件減少しており、その減少がそのまま手術総数の減少となっている。静脈切開による中心静脈カテーテル挿入、リンパ節生検、気管切開など局所麻酔下の手術を計102件実施した。内視鏡手術は391件に行われ昨年と比較して5件減少とほぼ同数であった。鼠径ヘルニアに対しては当院で開発された、術創が残らない単孔式腹腔鏡下鼠径ヘルニア根治術（SILPEC）が標準術式となっているため内視鏡手術は60件以上減少するはずであったが、ほぼ同数であったことを考えると、今まで開腹で行われていたような疾患に対して、内視鏡手術が行われていることが明らかである。内視鏡手術の内訳として、鼠径ヘルニア根治術(217件)、虫垂切除術（42件)、噴門形成術（16件)、肥厚性幽門狭窄症に対する幽門筋切開術（９件)、腫瘍に対する生検術・摘出術(15件)、漏斗胸に対するNUSS手術（９件)、完全胸腔鏡下肺葉切除術（６件)、腸重積症（３件)、鎖肛に対する腹腔鏡補助下造肛術（２件)などがあげられる。今年度は胃軸捻症（遊走脾も含む）に対して単孔式胃固定術が比較的多く行われた。

外来新患数が前年度と比較して41名減少し、平成18－20年度の平均と比較すると約60名減少している。周辺医療施設が小児医療から撤退してきているが、当院への集約化を進めるための受け入れ態勢が整っていないために減少していると考えられる。また小児人口の減少も関わっているとは思われる。新生児外科症例はここ数年横ばいもしくは減少しており、当センターでも胎児診断を含めた周産期医療体制の早急な構築が必要であろう。

（内田　広夫）

スタッフ

内田広夫	（科長兼部長、日本小児外科学会専門医、指導医、日本外科学会専門医、日本内視鏡外科学会技術認定医）
川嶋　寛	（医長、日本小児外科学会専門医、指導医、日本外科学会専門医、日本内視鏡外科学会技術認定医、6月まで）
田中裕次郎	（医長、日本小児外科学会専門医、日本外科学会専門医）
佐藤かおり	（医長、日本小児外科学会専門医、日本外科学会専門医、日本内視鏡外科学会技術認定医）
高澤慎也	（医員、日本外科学会専門医）
神保教広	（医員、日本外科学会専門医）
出家亨一	（レジデント、10月から）

表１　入院患者、緊急手術、内視鏡手術の年齢分布

年齢	1月未満	1-12月	1-5歳	6-11歳	12-15歳	16歳以上	合計	緊急手術
患者数	53	95	309	168	64	8	697	
比率(%)	7.6	13.6	44.3	24.1	9.2	1.1	100	
緊急入院数	49	40	79	51	38	2	259	134
比率(%)	18.9	15.4	30.5	19.7	14.7	0.8	100	
内視鏡	13	45	177	116	34	6	391	
比率(%)	3.3	11.5	45.3	29.7	8.7	1.5	100	

表２　入院患者の主たる疾患別分布、手術の内訳

疾患名	患者数	手術数	内視鏡	疾患名	患者数	手術計	内視鏡
新生児疾患 **（新生児期に治療していないものも含む）**				その他の疾患			
				鼠径ヘルニア・水瘤	228	227	217
食道閉鎖	8	5	3	臍ヘルニア	24	30	
食道閉鎖術後	3	2	1	腹壁ヘルニア	2	2	1
腸閉鎖、狭窄	12	13	3	停留精巣	5	9	
腸回転異常	5	6		GER	30	17	16
ヒルシュ	14	7	7	GER術後	7	5	
ヒルシュ術後	5	2		虫垂炎	54	42	42
ヒルシュ類縁	2	2		PS	11	9	9
低位鎖肛	5	4		腸重積	36	4	3
中間位、高位鎖肛（cloacal extrophyも）	5	6	2	腸重複症	4	5	
鎖肛術後（cloacal extrophyも）	14	10		側頸、梨状窩瘻・嚢胞	1	1	
臍帯ヘルニア	4	4		BA（胆道閉鎖）	2	2	
NEC/LIPS	1	1		BA（胆道閉鎖）術後	11	4	3
新生児嘔吐（含ミルクアレルギー）	6	0		BA疑いでBAでない	1	1	1
				門脈異常	9	13	11
				胆道拡張症	9	7	5
				胆道拡張症術後	3	1	
				膵炎	10		3
				イレウス	8	6	5
				炎症性腸疾患	1	1	1
				漏斗胸	13	13	9
腫瘍性疾患				気管	9	10	
				気道異物	1	1	
神経芽腫	8	10	7	肺	7	6	6
肝腫瘍	6	8	1	外傷	4		
WTなど腎腫瘍	1	2	1	異物誤飲、消化管異物	1		
奇形腫群	6	7		結石		1	1
リンパ管腫血管腫	9	3		自然気胸	4	2	2
RMS	1	2	1	食道狭窄	11	10	3
ポリープ・ポリポーシス	2	3	3	正中頸瘻・嚢胞	1	1	
メッケル	2	2	2	腸炎、腸間膜リンパ節炎	2		
悪性腫瘍（その他）	3	3	2	尿膜管	4	4	
縦隔	5	3	3	皮膚・皮下腫瘤	12	10	
卵巣嚢腫	1	1	1	胃軸捻	6	6	6
				胎便性腹膜炎	2	2	
				短腸症候群	1	0	
				脾臓	1	1	1
				臍炎、臍肉芽腫	1	1	
				臍腸管	1	1	
				その他	32	16	8
				総計	697	591	390

心臓血管外科

平成23年度の心臓血管外科手術総数は129件であり、手術死亡は１例であった（急性僧帽弁腱索断裂４ヶ月乳児）。内訳は体外循環未使用手術（主に動脈管開存、シャント、肺動脈絞扼などの姑息術）28例、体外循環使用手術は101例であった。心大血管手術は125件で、その他(肺生検、ペースメーカー)は４件であった。

年齢分布は、新生児18例(14%)を含む乳児症例52例(40%)と昨年とほぼ同等であった。Norwood手術に対するBTシャント、Ross手術、肺静脈還流異常に対するDouble decker法など、今年度も新しい手術式を可能な限り取り入れた。循環器科、麻酔科、新生児科、関係各位の協力により手術件数の増加はもとより、重症新生児疾患を適切な時期を逸することなく介入できる環境が整ってきた。また今年度はMEの協力のもと、人工心肺症例数が開院以来初めて100例を超え体外循環症例が全症例の約８割を占めた。早期離床を目的とした心房中隔欠損、心室中隔欠損など軽症例での手術室抜管も定着し早期退院に寄与している。あらためて関係各位に感謝する次第である。

（野村耕司）

スタッフ

野村耕司　　（部長兼科長　日本胸部外科学会指導医、日本心臓血管外科専門医）
黄　義浩　　（医長　日本心臓血管外科専門医　日本循環器学会専門医）
阿部貴行　　（医員）
保科俊之　　（レジデント）

表１　体外循環使用例

	28日未満	～１歳未満	１歳以上	計	備　　考
完全大血管転位症	9	2		11	Jatene:9　Aubert:1　Re-PAB:1
大動脈弓離断複合	1	1		2	Norwood+BT:1　AVSD:1
肺動脈閉鎖症	2	3	8	13	Rastelli:6　RV-Pashunt:2
総肺静脈還流異常症					
心房中隔欠損症			15	15	MVP1
肺静脈還流異常症合併			2	2	Double Decher:1
不完全型房室中隔欠損症			1	1	
完全型房室中隔欠損症		4	3	7	One patch:1
心室中隔欠損症		8	9	17	
肺動脈狭窄症合併			3	3	
ファロー四徴症			9	9	BT:2　肺生検:1
両大血管右室起始症			1	1	PAB:1
BWG症候群					PAB:2
単心室		1	11	12	TCPC:8　BCPS:3　DKS:1
Ebstein奇形					
修正大血管転位症					
右室二腔症					
その他			10(1)	10(1)	Ross:1　Konno:1(MVR:1)
計	12	19	62	93	

（　）手術死亡数

表２　体外循環未使用例

	28日未満	～１歳未満	１歳以上	計	備　　考
動脈管開存症	2	5	1	8	
大動脈縮窄／離断	4	1		5	両側PAB:2
肺動脈閉鎖	2	2		4	BT:4
心房中隔欠損症					
心室中隔欠損症					
ファロー四徴症		2	1	3	BT:2　肺生検:1
三尖弁閉鎖症		1		1	PAB:1
房室中隔欠損症		2		2	PAB:2
両大血管右室起始症		1	1	2	BT:1　肺生検:1
左心低形成症候群					
ペースメーカー			2	2	電池交換:1
その他		1		1	血管輪:1
計	8	15	5	28	

（　）手術死亡数

脳神経外科

平成23年度の脳神経外科診療は常勤医３名（脳神経外科学会専門医）、レジデント１名にて行われた。各レジデントの任期は３カ月であった。

外来部門は、年間延べ患者総数5651名、新患総数240名、再来患者総数 5411名であり、再来患者総数は例年通りであったが、新患総数が増加した結果、年間延べ患者総数が増加した。

入院部門は入院延べ患者総数171名で、昨年度より増加した。疾患別では中枢神経系奇形37％、脳脊髄腫瘍24％、頭部外傷12％、脳血管疾患20％、炎症性疾患5％であり、中枢神経系奇形がわずかに減少し、脳血管疾患および頭部外傷が増加した。年齢別では新生児・乳児27％、１－２才12％、３－６才30％、７才以上30％であり、１歳から２歳までの幼児例が減少し、３歳から６歳までの幼児例が増加した。平成23年度は３歳から６歳のもやもや病患者が多かったのが特徴であったと言える。

手術総数は109件であり、わずかに減少した。手術内容では脳室―腹腔吻合術24件、脳腫瘍摘出術 12件、脊髄脂肪腫摘出術6件、脳血行再建術（EDAS/EMS）９件、神経内視鏡手術 ６件などが多かった。平成23年度は手術低侵襲手術として神経内視鏡手術に加えて、脳深部脳腫瘍に対するCTガイド下定位的脳腫瘍生検術を開始した。また発達能力の向上を目指して行っている選択的脊髄後根神経切断術に加えて、巨頭症に対する頭蓋縫縮術を行った。小児重症脳神経外科患者に対する手術可能な県内唯一の施設として、今後も小児の神経機能および発達を考慮した低侵襲で積極的な治療を行っていきたいと考えている。

本年度は入院数、新患数ともに増加傾向にあり、また手術数がわずかに減少したものの重症症例の治療や低侵襲手術、機能的手術が増加していることから、重症脳神経外科患者の治療を担う小児病院としての機能が十分に発揮できた診療内容であったと考えている。

（栗原　淳）

スタッフ

西本　博　　（副病院長　脳神経外科学会専門医）
栗原　淳　　（科長兼副部長　脳神経外科学会専門医）
角光一郎　　（医員　脳神経外科学会専門医）～平成23年９月
谷地一成　　（医員　脳神経外科学会専門医）平成23年10月～

表１　入院患者疾患別・年齢別内訳（平成23年度）

疾患	新生児	乳児	１－２才	３－６才	７才－	計
１．中枢神経系奇形						
先天性水頭症	2	3	2	5	5	17
全前脳胞症						
Dandy-Walker奇形						
脊椎破裂	1	1				2
脊椎破裂＋水頭症	1					1
頭蓋破裂	1	3	1			5
頭蓋破裂＋水頭症	1					1
脊髄脂肪腫		7	1			8
先天性皮膚洞・皮様嚢腫		3			1	4
Thight Filum Terminale		4			1	5
脊髄空洞症				2	1	3
くも膜嚢腫		2	4	2	5	13
孔脳症						
狭頭症・頭蓋顔面奇形		1	1	2		4
２．脳脊髄腫瘍						
大脳半球腫瘍				3	7	10
脳室内腫瘍			1			1
脳幹部腫瘍			1	8		9
鞍上部・視神経腫瘍			1	1	2	4
小脳・第４脳室腫瘍		1	1	3	2	7
松果体部腫瘍					1	1
眼窩内腫瘍				1		1
頭蓋骨腫瘍		1	3			4
脊髄腫瘍		1		1	2	4
３．頭部外傷						
慢性硬膜下血腫		2	1			3
急性硬膜下血腫		2				2
急性硬膜外血腫		2			1	3
硬膜下血腫（分娩時）						
脳挫傷・脳内血腫	1			2	1	4
びまん性白質損傷						
頭蓋骨骨折		2	1	1		4
頭血腫・帽状腱膜下血腫				1		1
脳震盪・頭部外傷後症候群						
外傷性水頭症						
外傷性脳血管疾患		3				3
４．脳血管疾患						
脳室内出血後水頭症		1		3	2	6
脳梗塞						
もやもや病			1	9	16	26
脳動静脈奇形					3	3
脳動脈瘤						
出血性素因による頭蓋内出血						
５．炎症性疾患						
髄膜炎後水頭症			2	2	1	5
頭蓋骨骨髄炎						
脳膿瘍				1	1	2
硬膜下膿瘍						
脳・髄膜炎・脳炎	1					1
６．その他				4		4
計	8	39	21	51	52	171

（1C入院を含まず）

表２　手術数（平成23年度）

脳室ー腹腔吻合術	24
脳室ー心耳吻合術	0
硬膜下腔ー腹腔吻合術	3 (4)
嚢腫ー腹腔吻合術	3
空洞ーくも膜下腔吻合術	0
脳腫瘍摘出術	12
眼窩内腫瘍摘出術	0
脊髄腫瘍摘出術	3
頭皮・頭蓋骨腫瘍摘出術	3
くも膜嚢腫開放術	2
頭蓋内血腫摘出・除去術	
硬膜下血腫	3
硬膜外血腫	1
脳内血腫	0
脳動静脈奇形摘出術	1
脳動脈瘤根治術	0
EDAS/EMS	9
脊椎破裂根治術	3
脊髄脂肪腫摘出術	6
先天性皮膚洞摘出術	6
頭蓋破裂根治術	3
頭蓋形成術	4 (5)
頭蓋顔面形成術	2
上位頚椎・後頭蓋窩減圧術	3
開頭・排膿ドレナージ術	3
脳室リザーバー・マッカムチューブ装着術	1
穿頭・脳室ドレナージ術、硬膜下ドレナージ術	6 (13)
穿頭・頭蓋内圧センサー装着術	0
神経内視鏡手術	5 (6)
選択的脊髄後根切断術	3
血管内手術	0
計	109

（　）内、同時手術における延べ手術数

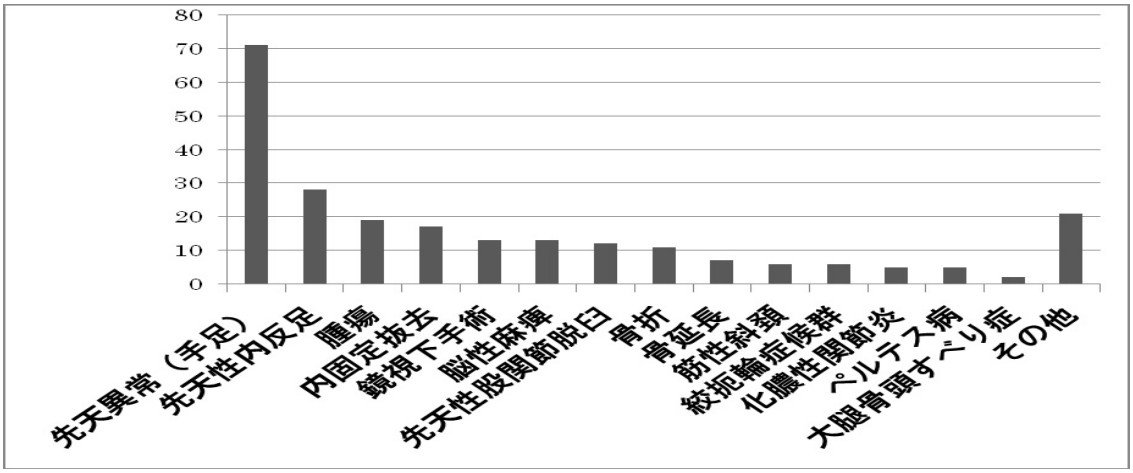
整形外科・リハビリテーション科

平成23年度の外来新患数は683人で、平年並みであった。疾患別では股関節疾患が最多で、次いで先天性疾患が多くみられた。入院患者数は240人であった(表1)。手術件数は237例で、例年通り多合指症、痙性尖足に対する手術が多く(表2)、緊急手術は化膿性関節炎による切開排膿術であった。また、平成20年度より取り入れている先天性内反足に対するponseti法（アキレス腱皮下切健術）が28件と徐々に増加している。その他23年度増加した手術は、腫瘍性疾患（19件)、鏡視下手術（13件）であった。新しい試みとして平成22年度に開始した、脳性麻痺患児の痙性尖足、斜頸、に対するボツリヌス注射も月2回に施注機会を増加させ対応している。

表１　入院患者数

病棟	人数
２C	128
１B	111
１C	1

表２　手術種類内訳



形成外科

平成23年度は新患総数が627件となり(表１左)、平成22年度より10%近く減少した。口唇口蓋裂の新患数は年間71件とほぼ昨年並みであったが、血管腫・血管奇形や母斑の新患数が減少した事が総数に影響していると考えられた。母斑患者全体数は減少しているものの、Ｑスイッチルビーレーザーを導入したため、この器械の治療対象である異所性蒙古斑・太田母斑・青色母斑といった母斑患者は28例と非常に増加した。中央手術室における手術件数は208件であった(表1右)。

長年の懸案であった３人体制での診療となり、昭和大学より渡辺あずさ医師、近畿大学より中尾仁美先生が赴任された。３人体制になった事から外来診療枠を2診同時に診療できるよう改編し、新生児で受診希望の患者はほとんど待つことなく予約受診することが可能になった。

新しい試みとしては、唇顎口蓋裂チーム医療において矯正歯科医に顎印象採取を担当していただけるようになったことから、新生児期の哺乳障害に対し口蓋床の作成が可能になり、これまで苦労してきた哺乳指導が相当改善された。また術前顎矯正を施行したのちに手術する唇顎口蓋裂患者が増加したため、これまでの火曜日午後に加えて、隔週金曜日午後にも矯正科医の同席する外来を新設した。

血管腫・血管奇形の治療に関しては治療困難な新患患者の実数がさらに増加しているが、血液腫瘍科・整形外科・放射線科・理学療法士等に協力していただいてチーム医療として昨年度と変わることなく診療を行っている。

創傷ケア外来に関してはWOCナースの努力もあり、ケアが必要な患者や関連するセクションには十分に周知されたようである。毎週着実に患者は10人前後受診しており、今後の展望としては皮膚科の非常勤医師とも連絡を取って継続していく方向である。

頭蓋顎顔面変形症患者に関しては脳外科とのコラボレーションにより、チーム医療として機能するようになった。今後は呼吸障害のみられる頭蓋縫合早期癒合症候群患者の顔面骨延長に関して適応を模索していく方向である。

耳介奇形に関しては小耳症の患者は初診数に大きな変化はなく、その治療にまで手が回らないため昭和大学の吉本教授にお出でいただき、少数ながら治療を開始した。

大きな悩みは手術数に関して存在し、経験豊富な医師が赴任したことにより術者として２人が同時に手術を進行可能な陣容であり、かつ手術適応のあり手術を希望する患者数も十分にいながら、手術枠の問題があるため手術数を増加できない事にある。３人体制になりながら平成22年度以上の手術件数が達成できなかったのは風邪などによる予定手術の中止の割合が平成22年度に比べて増加したためであるが、今後は近隣の同業病院と同等の手術件数ができるよう努力していきたい。

（渡邊彰二）

スタッフ

渡邊彰二　　（科長兼部長　日本形成外科学会専門医　皮膚腫瘍外科指導医）
渡辺あずさ　　（医長　日本形成外科学会専門医）
中尾仁美　　（医員）

表１　新患と手術

	平成23年度		平成23年度
新患総数	627	手術件数(中央)	208
単純性血管腫	68	口唇裂初回口唇手術	3
イチゴ状血管腫	138	唇顎裂初回口唇手術	16
血管奇形	37	唇顎口蓋裂初回口唇手術	12
血管腫小計	243（38.76%）	小計	31
色素性母斑	38	口蓋裂初回口蓋手術	17
扁平母斑	14	唇顎口蓋裂初回口蓋手術	12
脂腺母斑	15	小計	29
その他	33		
母斑小計	100（15.95%）	口蓋再形成術	0
		口蓋瘻孔閉鎖（舌弁含む）	6
皮膚腫瘍	53(8.45%)	顎裂部骨移植	1
		顎裂＋瘻孔閉鎖(舌弁含む)	0
口唇裂	0	Abbe	0
唇顎裂	23	口唇鼻修正術（Abbe除く）	13
唇顎口蓋裂	23	咽頭弁	6
口蓋裂	22	歯槽前庭拡張	0
先天性鼻咽腔閉鎖不全	3	小計	26
口唇口蓋裂小計	71(11.32%)		
		小耳症エキスパンダー	1
小耳症	5	小耳症肋軟骨移植	0
埋没耳	10	小耳症耳起こし	0
副耳	19	小計	1
その他耳介奇形	6		
耳介小計	40（6.38%）	耳介形成術	5
		副耳切除	8
指趾先天異常	27（4.31%）	小計	13
頭蓋顎顔面形態異常	5（0.80%）		
（HFMは含まない）			
眼瞼下垂	10（1.59%）		
(眼裂狭小症候群含む)			
皮膚潰瘍	5（0.80%）		

泌尿器科

＜入院＞入院患者数は388名であった。病床数の削減を余儀なくされた平成17年度（234名）を除いて昨年度、本年度ともに漸増傾向にある。手術患児が78.3％を占めるが、他に急性腎盂腎炎の治療やそれらの原因精査目的、神経因性膀胱の定期検査や清潔間欠導尿指導目的、内分泌負荷試験目的などであった。平均在院日数は6.19日であった。

＜手術＞手術患者数は311名で425件の手術が行われた。尿道下裂は増加傾向にあり、全て一期的尿道形成術を行い良好な成績が得られた。膀胱尿管逆流に対する尿管膀胱新吻合術は年ごとに増加しており、特に乳児例で目立っている。また、従来は経過観察の方針としていた軽度逆流残存症例に対して内視鏡下（経尿道的）逆流防止術を導入しており、症例総数も順調に増加している。神経因性膀胱は本来、保存的治療（清潔間欠導尿法）が主流であるが、腎機能保持、尿路感染症対策、尿失禁対策に保存的治療のみでは限界のある症例に対して、腸管利用膀胱拡大術を行った。また外科の協力のもとに非触知精巣と精索静脈瘤に対する腹腔鏡下性腺手術や低形成腎への腹腔鏡下腎摘除術を積極的に導入しており、従来開腹手術で施行していた腎盂形成術も今年度より腹腔鏡下手術を導入し良好な結果を得ている。腹腔鏡下手術は入院期間を短縮させ美容的にも優れており、腹腔鏡手術の総数は230例程度になった。今後更なる適応疾患の増拡大と症例数の増加が見込まれる。（表１）。

＜外来＞超音波診断装置の設置により患児の負担を最小限にして、泌尿器系のスクリーニングが可能となっている。外来患児数は漸増傾向にあり、１日の平均来院患児数は今年度も50人を超えた。（50.7人/外来診療日）

スタッフ

多田　実　　（科長兼部長　日本泌尿器科学会指導医、専門医　日本小児泌尿器科学会認定医）
小林　堅一郎　（副部長　日本泌尿器科学会指導医、専門医　日本小児泌尿器科学会認定医）
益子　貴行　　（専門研修医　日本外科学会専門医　日本小児外科学会専門医）

表１　平成23年度主要手術の内訳

表１　平成23年度手術件の内訳

(1)	腎臓	
	腎盂形成術	５例
	腹腔鏡下腎盂形成術	６例
	腹腔鏡下腎摘除術	６例
	膀胱鏡、膣鏡、外陰部精査	15例
(2)	尿管、膀胱	
	尿管膀胱新吻合術	47例
	経尿道的逆流防止術	37例
	経尿道的尿管瘤切開術	６例
	腸管利用膀胱拡大術	３例
(3)	尿道	
	尿道下裂形成術	33例
	包茎手術	12例
	経尿道的弁切除	10例
(4)	精巣	
	精巣固定術	110例
	水腫根治術	15例
	精巣摘除術	15例
	ヘルニア根治術	５例
	腹腔鏡下水腫根治術	５例
	腹腔鏡下精索静脈瘤手術	４例
	腹腔鏡下停留精巣手術	55例

耳鼻咽喉科

平成23年度は、引き続き常勤医２名（浅沼聡、安達のどか）と、レジデントとしてH23年４月～東京大学より斉藤真紀が、H24年1月～牧角祥美先生が派遣され計３名で診療を行っております。非常勤医は、加我君孝先生（東大前教授）、佐藤妃枝子先生（日大小児歯科,睡眠時無呼吸症患者の歯科治療担当）、坂田英明教授（目白大学）です。

当科はこれまで通り、小児耳鼻科疾患全般にわたり診療しておりますが、とくに小児難聴の早期発見・療育、いびきと睡眠時無呼吸の診断・治療、めまい・平衡障害の診断・治療、在宅気管切開管理の４本柱があります。一般外来のほかに７つ専門外来があり、新生児聴覚スクリーニングで発見された1歳までの乳児を対象とした難聴ベビー外来（音楽療法）、加我外来、人工内耳外来（山岨教授）、補聴器外来、在宅気管切開管理などの気管切開外来、気管・喉頭外来、サイトメガロウイルス（CMV）外来などがあります。

専門外来として、まず加我外来においては、聴覚・平衡障害のみならず様々な合併症を有し、診断や治療とその後の対応に難渋する患者さん全般の診察を御願いしております。表面的な疾患や障害のみならず、内面的なケアを含んだ全人的な診療がなされており希望者は絶えないのが現状です。

また音声・喉頭の専門家として東大耳鼻科音声・喉頭グループのリーダーである二藤隆春先生に２ヶ月に一度専門外来を御願いしております。先天喘鳴や吸気性の呼吸障害の診断と治療、年々増え続ける気管切開児の閉鎖の問題があり、困難であった喉頭領域の手術も助けて頂き治療の選択肢の幅が広がりました。

当科は平成12年より新生児難聴スクリーニングによる難聴児の発見とその後の対応にこれまで力を注いできた歴史があります。早期の難聴原因検索、その後の療育への一連の流れ、両親への精神的サポートを、チーム医療（耳鼻科、小児科、ST、看護師、社会福祉士、音楽療法士など）の助けを得て行っております。その難聴ベビー外来は、月一回の12回コースですが、基本的には50dB以上の両側感音難聴児を対象にしており、平均20～25人くらいの参加者がおります。聴力レベルといっても個人差が大きく、変化に富むため、注意深い経過観察が重要だと感じております。ただ音楽療法士の派遣は、現在無償で都内より来て頂いており、近い将来派遣が難しい現状があります。どうにか交通費等の対応ができ、今後も継続できればと毎年悩んでおります。

当科と感染免疫科との連携により精査可能となったサイトメガロウイルス感染症ですが、産科より紹介の新生児聴覚スクリーニングが要再検であった新生児全例を対象としたCMVスクリーニングを行っているのが特徴的です。更に、治療に踏み込んだ臨床的プロトコールは全国でも注目されている分野であり、高度両側感音難聴に対しての治療は当院のみと言われております。CMV外来では、治療については、感染免疫科の大石勉部長、神経発達評価を岡明教授（杏林大学）、聴力評価を坂田英明教授が担当しております。

当科が関連している研究としましては、厚生労働科学研究費補助金（感覚器障害研究事業）として、「人工内耳を装用した先天性高度感音難聴小児例の聴覚・言語能力の発達に関するエビデンスの確立」、「両側蝸牛神経形成不全の治療指針の確立」、「小児Auditory Neuropathyの診療指針の確立」があります。

最後に、毎年６月に日本小児耳鼻咽喉科学会が開催されており、当院から多くの科からの参加者ご協力を頂いております。特に日常診療時に連携を密に取らせて頂いている関係で約10年前よりご参加頂き、毎回耳鼻科以外の視点からのご発表が特に高い評価を得ております。H23年は、大宮で開催されました。ご参加頂いた関係各位の先生方には深く感謝申し上げます。

スタッフ

浅沼　聡　　（科長兼部長）
安達のどか　　（医長、日本耳鼻咽喉科学会専門医）
牧角祥美　　（専門研修医）

表１　H23年度手術件数（合計405件）（外来手術を含む）

①耳手術(325件)		③口腔・咽頭・喉頭・頸部(72件)	
鼓室形成術	15	口蓋扁桃摘出術	23
先天性耳瘻孔摘出術	3	口蓋扁桃摘出術及びアデノイド切除術	30
副耳切除術	11	アデノイド切除術	2
副耳結紮術(外来)	12	舌小帯延長術	3
鼓膜チューブ留置術(全麻)	33	舌腫瘍切除術	1
鼓膜チューブ留置術(外来)	245	頸部腫瘍切除術	2
外耳道異物摘出術	4	咽後膿瘍切開術	1
その他	2	下口唇のう胞摘出術	1
		喉頭微細手術	5
②鼻手術(8件)		その他	4
APC（鼻アルゴンプラズマ凝固術）	4		
鼻内異物摘出術	1		
逆性歯芽摘出術	1		
鼻腔腫瘍切除術	1		
鼻内異物摘出術	1		

表２　補聴器外来、聴力検査件数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
補聴外来	48	47	45	61	59	55	50	52	61	48	51	61	638
聴力検査	206	203	199	256	295	250	206	203	213	195	210	278	2714

眼科

平成23年度は昨年度から引き続き2人体制で診療を行った。

スタッフ

神部友香　　（医員　日本眼科学会専門医）
牧田みずほ　　（医員　平成23年３月～10月）
宮川由起子　　（専門研修医　平成23年11月～平成24年２月）
長谷川　瞳　　（専門研修医　平成24年３月～）

外来：外来新患数とその疾患内容を表1に示す。人数内容ともに例年どおりの傾向であった。
手術：６月より増枠となり、昨年度より患者数は増加した。
未熟児網膜症の発生状況： LASER治療を行った未熟児網膜症は11名19眼であった。

（眼科　神部　友香）

表１　外来新患疾患別内訳（平成23年度）

疾患名	症例数	疾患名	症例数
全身疾患による眼障害	119	水晶体脱臼	1
斜視、弱視	183	ぶどう膜欠損	1
屈折異常	103	小眼球	1
未熟児網膜症	34	網膜芽細胞腫	1
涙器疾患	31	黄斑低形成	1
眼瞼下垂	26	輪部デルモイド	4
睫毛内反	15	虹彩異色	2
脳内疾患による眼障害	14	虹彩突起	1
心因性視力障害	6	眼瞼腫瘍	1
眼振	17	無虹彩	1
網膜疾患	6	ぶどう膜炎	1
角膜疾患	7	重症筋無力症	1
白内障	6	眼瞼炎	1
血管腫	4	眼瞼縮小	1
色覚異常	2	眼底出血	1
霰粒腫	8	Marcus　Gunn症候群	1
母斑	2	Duane症候群	2
結膜炎	4	外傷	2
		合計	611

表２　入院患者の内訳（平成23年度）

疾患名	症例数
外斜視	37
内斜視	16
その他の斜視	10
睫毛内反症	10
鼻涙管閉塞	2
霰粒腫	2
網膜芽細胞腫	1
合計	78

皮膚科

皮膚科の常勤医師は21年度末に退職し、22年度以降は補充されることなく非常勤医師（週１日勤務）により対応した。外来診療は閉鎖し、入院患者を対象に他科からの依頼を中心に診療を行った。

麻酔科

平成23年度はスタッフ５名（水戸野、武藤、北村、濱屋、河村）でスタートしたが東日本大震災の復興支援を目的として河村医師が９月に辞職、次いで武藤医師が東邦大学への異動のため12月に辞職、さらに北村医師が1月に辞職したため手術室運営は困難を極めた。レジデントとして東京医科大学麻酔科より板橋医師（４月～９月）濱田医師（10月～12月）、東邦大学麻酔科より原田医師（４月～９月）宇佐美医師（10月～H24年３月）鶴見大学歯科麻酔科より北田医師（４月より１年間）の医師派遣、さらに東京医科大学麻酔科より週２日の麻酔科医派遣の協力をいただいた。

平成22年度から麻酔科医増員に伴い手術枠を改正し手術件数増加に努めてきたが、深刻な麻酔科医減員に伴い手術枠修正を検討したが手術件数の削減は難しく麻酔科医は大きく疲弊した。（表１）平成23年度は総手術件数1,870件（前年度1,838件）、麻酔科管理症例数1,730件（1,704件）、緊急・臨時手術362件であった。手術件数増加に対して手術室運営が評価され病院表彰を受けた。

（水戸野裕之）

スタッフ

水戸野裕之　（科長兼副部長　日本麻酔科学会指導医）
武藤　理香　（副部長　日本麻酔科学会指導医H23年４～12月）
北村　英恵　（医　長　日本麻酔科学会専門医H23年４～H24年１月）
濱屋　和泉　（医　長　日本麻酔科学会専門医）
河村　　真　（医　長　日本麻酔科学会認定医H23年４～９月）
板橋　俊雄　（専門研修医H23年４～９月）
濱田　隆太　（専門研修医H23年10～12月）
原田　昇幸　（専門研修医H23年４～９月）
宇佐美晶子　（専門研修医H23年10～H24年３月）
北田　綾乃　（専門研修医H23年４～H24年３月）

表１　月別手術件数（人）

	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月	累計
H18年度	103	113	128	147	189	148	148	127	150	142	136	160	1,691
H19年度	149	134	144	170	218	140	130	156	126	129	137	144	1,777
H20年度	141	116	125	165	171	140	166	127	101	132	122	145	1,651
H21年度	132	111	147	166	151	130	148	133	124	109	129	157	1,637
H22年度	161	117	134	171	205	159	139	154	152	144	142	160	1,838
H23年度	151	128	161	178	228	156	153	151	134	134	143	153	1,870

小児歯科

平成23年度の歯科業務は、常勤の専任歯科医師である高橋康男（歯科医長、日本小児歯科学会専門医、日本障害者歯科学会認定医)、日本大学歯学部小児歯科学講座より週２日派遣の黒木洋祐（非常勤歯科医師、日本障害者歯科学会認定医）および週1日派遣の武井浩樹（非常勤歯科医師）が診療業務にあたった。外来診療日については、月曜日、火曜日、水曜日（第１・第３水曜日は午前のみ）および金曜日の午前・午後、第３木曜日を除く木曜日の午前、計週５日間行った。歯科衛生士は、木場和江、佐藤清美、渋谷美保、佐藤康子および肥沼順子の５名が歯科診療補助、外来受付業務を行った。歯科衛生士の木場はDK.外来などの特殊外来による予防活動も行った。また、毎月第１木曜日午後、実施されているもぐもぐ外来（多職種プログラム外来）には専任歯科医師の高橋が診療に参加し、摂食に関連する歯科領域の指導を行った。さらに、高橋と木場は年３回実施されているすくすく外来（多職種プログラム外来）にブラッシング指導で参加した。

平成23年度の診療実日数は、計219（前年度223；以下のカッコ内は前年度の数とする）日で前年度より減少し、診療延べ患者数は計3817（3788）名と前年度より増加した。１日平均患者数は、17.5（17.0）名で前年度と比較し、増加した〔表１〕。年間初診患者数においては210（249）名で月平均17.5（20.8）名と前年度と比較し、減少した〔表２〕。院内初診患者は、各診療科からの紹介を原則とし、その内訳は外来172（189）名、入院38（60）名であり、初診患者は外来、入院とも減少した。紹介診療科別内訳は、遺伝科99（104）名と最も多く、ついで血液・腫瘍科24（38）名、以下、神経科14（13）名、循環器科10（９）名、発達・もぐもぐ外来９（14)、感染・免疫科９（９）名およびその他であった〔表3〕。

平成23年度の当科における主な業務内容は、従来通り齲蝕と歯周疾患の予防と処置が中心であった。また、咬合誘導処置などの自費診療についても常時行っていた。

さらに、オペ室において全身麻酔下での歯科処置を４件行った。

（高橋康男）

表１　月別診療実日数・診療延べ患者数・１日平均患者数（平成23年度）

項目	年	平成23年									平成24年			合計
	月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
診療実日数(日)		17	17	20	19	20	18	19	15	17	18	20	19	219
診療延べ患者数(名)		302	314	338	300	354	320	338	269	303	308	323	348	3,817
1日平均患者数(数)		17.8	18.5	16.9	15.8	17.7	17.8	17.8	17.9	17.8	17.1	16.2	18.3	平均 17.5

表２　月別初診患者数（平成23年度）

項目	年	平成23年									平成24年			合計
	月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
年間初診患者数(名)		21	15	20	21	12	25	11	12	20	22	18	13	210
		年間平均　：　17.5 名／月												

表３　初診患者の病棟別・疾患別内訳（平成23年度）

外来・入院別および病棟別内訳			紹介科別内訳					
			内科系			外科系		
● 外来	合計	172 名	血液・腫瘍科	24	名	小児外科	3	名
			神経科	14	名	心臓血管外科	1	名
● 入院			精神科	4	名	脳神経外科	6	名
養護第一病棟	（1A）	7 名	代謝・内分泌科	2	名	整形外科	1	名
養護第二病棟	（1B）	5 名	腎臓科	3	名	皮膚科		名
養護第三病棟	（1C）	名	遺伝科	99	名	耳鼻咽喉科	4	名
循環器病棟	（2A）	2 名	感染・免疫科	9	名	形成外科	4	名
外科第一病棟	（2B）	2 名	アレルギー科		名	眼科	2	名
外科第二病棟	（2C）	4 名	循環器科	10	名	泌尿器科	1	名
幼児学童内科病棟	（3A）	14 名	総合診療科	5	名	麻酔科		名
乳児内科病棟	（3C）	4 名	未熟児・新生児科	4	名	放射線科		名
未熟児・新生児病棟	（3D）	名						
	合計	38 名	合計	174	名	合計	22	名
			発達，もぐもぐ外来			一般外来		
初診患者数	合計	210 名	合計	9	名	合計	5	名